

＊ 「杖突方位盤」など前山仁郎氏が残した器具

国立天文台の前身である東京天文台の元職員に前山仁郎という人がいた。東京天文台の在職は昭和17年10月～昭和38年8月である。在職中に49歳でお亡くなりになったと記憶している。同じ昭和38年11月には電波天文学の開拓者であった畑中武夫先生も49歳で亡くなったこともあり、東京天文台では49歳が鬼門と言われたものである。天文月報1963年11月号に広瀬秀雄氏による前山仁郎氏の追悼文が掲載されている。

前山仁郎氏は、府立第一商業学校を卒業され日立製作所に入社されたが、その後退職し、第一高等学校を経て東京帝国大学理学部天文学科を昭和17年9月に卒業され、東京天文台に勤務し、編暦の仕事をしてきた。広瀬氏の表現によれば、編暦という仕事は地味なものであるが、天文台の社会への窓口の一つであり、文化的、社会的、歴史学的に広い知識が必要である。この仕事に前山氏を迎えたことは天文台にとって幸運であったと言われるほど、前山氏はギリシャ、ラテンの古典語、数学、編暦の歴史の研究に打ち込まれた。氏はまた非常に謙虚な人柄で、その知識を示すようなことがなかったそうであるが、十数冊の調査ノートと数百巻の文献フィルムを残された。これらは現在国立天文台図書室に「前山文庫」として残されているはずである。この前山文庫の中に図書室で保管するよりは、アーカイブ室所蔵の方が適当ではないかと表記のもの(写真1)が持ち込まれた。

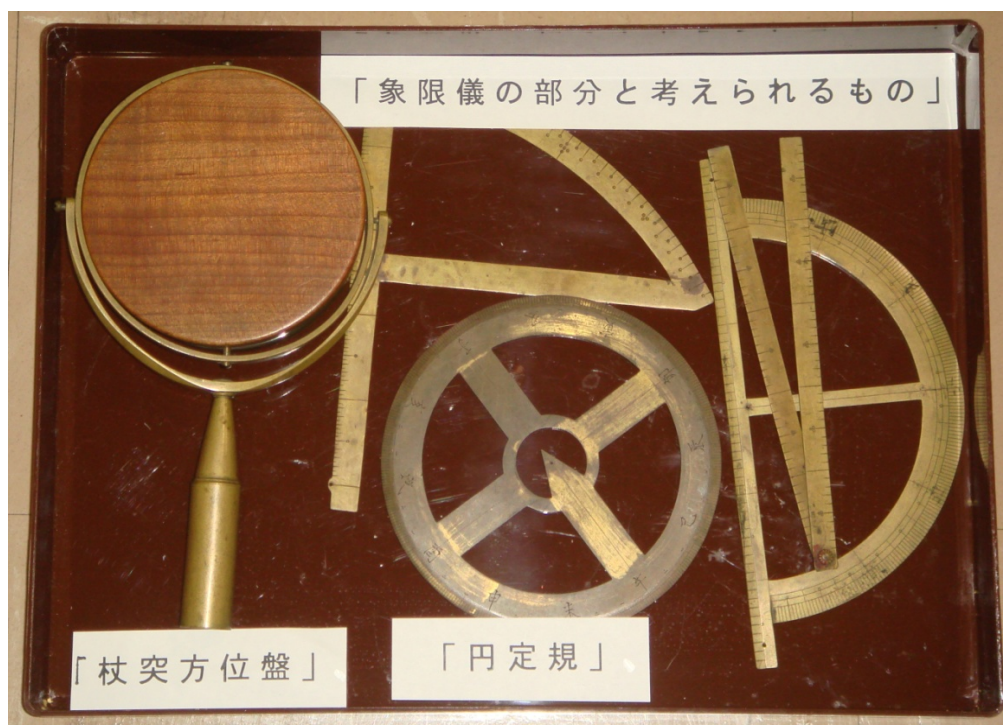


写真1 3種類のものが入った箱

このうち、「杖突方位盤」は国立天文台所蔵貴重資料展示図録に No. 28 として載っている。この「杖突方位盤」は国立天文台所蔵貴重資料展示図録に収録された唯一の器物である。これらのうち、「杖突方位盤」（写真2）は杖の部分がないがほぼ完全なものである。「円定規」はこれ一つで完全な形と思われるが、他のものは「象限儀の部品と考えられるもの」と記されている。これらは天文の機器というよりは測量の道具だと思われる。



写真2 杖突方位盤

「杖突方位盤」の裏には作者の銘が彫られており「大野作」とある（写真3）。大野家は幕府の天文台御用を務めた時計師の家系で、測量機器も製作し、伊能忠敬の測量器具も製作したとある。

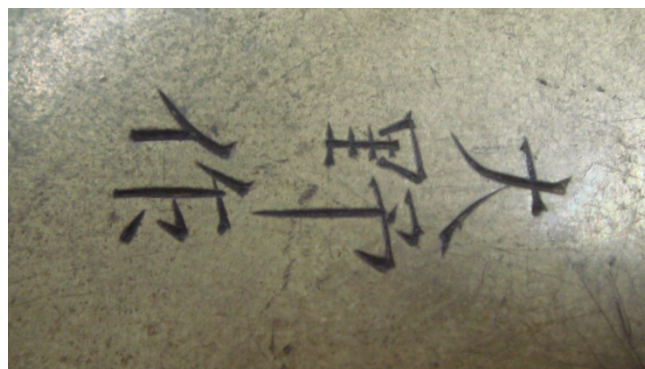


写真3 「杖突方位盤」の裏にある刻印

方位の測量に使う道具のように、写真2に見られるように盤の両端に縦の「スリット」を立てて方位を測るようになっているが、これは磁石の北からの方位を読み取るために使ったようだ。測量では見定めた方位に線を引く必要があり、この道具では線を引くことが出来ない。杖が傾いていても「杖突方位盤」は水平になるようにジンバル構造になっている。また磁石盤のガラスを守るための木製の蓋（写真4）が付いている。方位盤には「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」と12の方角が記されている（写真4）。



写真4 杖突方位盤の木製の蓋と文字盤



写真5 円定規と書かれたもの

円定規と書かれたもの（写真5）も、単純な円定規ではない。円の中心に穴が開いた矢印になっており、「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」と12の方角が彫られ、それぞれに間に1度おきにメモリが刻まれている。目盛は外周に向かって斜めに薄くなって方位角を誤差が少なく読めるように工夫されている。

象限儀の部品と思われる3点にもそれぞれに複雑なメモリが刻まれている。どのように組み立てれば象限儀になるのか、興味深い。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp